

## 大会総括

閉会にあたりまして、大会総括を中村浩志先生にご挨拶を承りたいと思います。よろしくお願いたします。

**○中村** 2日間に渡る、ライチョウ会議ぎふ大会、昨日の一般公開のシンポジウム、そして今日のライチョウフォーラムを無事に終了することができました。新型コロナの感染が心配される中、多くの方に参加いただき、講演や発表をお聞きいただきましたこと、そして、一緒にライチョウの保護を考えていただきました参加者の皆さんに、私から心よりお礼を申し上げさせていただきます。

現在は、環境省のライチョウ保護増殖計画を基にライチョウの保護が進められています。これは、生息現地での保護、動物園等で飼って増やす保護という、2つの面から進められています。

そして、今日の午前中には、生息現地でどんな保護対策が行われているのか、そして今日の午後は、前半で動物園で飼育されている方の発表、後半には大学で専門の立場から研究をされている先生方を中心に発表がありました。そのため、今日の午後の発表というのは、大変専門的な話で、難しいところがあったかもしれませんが、現在、ここまで専門的な立場からもライチョウの保護の研究が進められていることがお分かりいただけたかと思います。

今日の午前中に発表された兼子さんのお話をお借りしますと、日本のライチョウは今、信号機の色に例えると、赤信号です。環境省のライチョウ保護増殖計画は第1期を終えて、今年度から第2期に向けて、保護活動を進めています。

そして、当面の目標は、中央アルプスにライチョウを復活させる、また減少しているほか山のライチョウの数の減少を食い止めることで、できたら5年後にライチョウが現在の絶滅危惧IB類からII類に戻すことです。つまり、赤信号から黄信号にもっていくことが、当面の目標です。

その先の目標は、ライチョウが人の手を借りなくとも自分たちだけで集団を維持できる状態、青信号に持ってゆくことが最終目標です。

これにはまだまだ、時間がかかります。日本のライチョウというのは世界の最南端の地で高山に住む、人を恐れない、世界でただ1つの集団です。この貴重なライチョウを次の世代に確実に引き継いでゆく、そのためには、日本の貴重な高山の自然と共に残していかないと、ライチョウも残らないのです。未だ、道半ばです。多くの方の叡智を結集して日本のライチョウが絶滅した、というようなことにならないように、これからも保護活動を行なっていきたいと思います。

次の大会、第20回ライチョウ会議の大会は、中央アルプスの麓の長野県の駒ヶ根市と宮田村で来年度、開催する方向で今、検討を始めています。来年のいつ開催するかは決まっていますが、引き続いて皆さんのライチョウ保護への理解と協力を、よろしくお願いたします。

最後に、今回の大会を企画していただいたライチョウ会議ぎふ大会の実行委員会の皆さん、それから、大会の企画と準備にあたっていただきました岐阜県の担当者の方々、それか

ら，大会当日の運営に携わっていただきました岐阜大学の応用生物科学部の生徒さん，これらの方々に改めてお礼を申し上げます。

ありがとうございました。